

第70回日本放射線技術学会総会学術大会 印象記

横塚 記代

Yokotsuka Noriyo

はじめに

4月10日(木)～4月13日(日)まで横浜市にある“パシフィコ横浜”にて、日本ラジオロジー協会 (Japan Radiology Congress ; JRC) 2014 が開催されました。JRC2014は、第73回日本医学放射線学会 (Japan Radiological Society ; JRS) 総会、第70回日本放射線技術学会 (Japanese Society of Radiological Technology ; JSRT) 総会学術大会、第107回日本医学物理学会 (Japan Society of Medical Physics ; JSMP) 学術大会、日本画像医療システム工業会 (Japan Medical Imaging and Radiological Systems Industries Association ; JIRA) による2014国際医用画像総合展 (The International Technical Exhibition of Medical Imaging ; ITEM) の合同で実施されました。筆者は、JSRTを中心とした学術大会及びITEMに参加したので、その報告と感想を述べさせていただきます。

今大会に参加して

JRC2014のメインテーマである“Face to Faces, Face to Communities, Face to the World—向きあう、つながる、そして広がる—”の「Face to Communities—つながる—」に関連した2つの団体とJSRTの共同企画がとても印象的でした。共同企画は2つあり、日本循環器学会 (The Japanese Circulation Society ; JCS) とのシンポジウム「虚血性心疾患における診療と技術のハーモニー—安全な検査・治療のために知識と技術を共有する—」と、日本サッカー協

会 (Japan Football Association ; JFA) との「チーム医療とリスペクト」をテーマとした“人材育成”に関するシンポジウムです。前者のJCSとの共同シンポジウムでは、虚血性心疾患に対する各検査の重要な視点や新たな知識を得ることができました。今回発表してくださったCT検査、MRI検査、超音波検査、心電図検査、核医学検査の専門家による各検査の特異性や診断所見などを把握することで、各々が専門としている検査において今まで以上に診断に有効な画像や情報を提示できるのではないかと感じました。特に筆者自身は、専門としている核医学と、大学で講義をしている超音波検査以外の内容が大変勉強になりました。核医学検査施行者の立場としては、SPECT-CTやSPECT-MRなど診断機器が融合した最新機器の取扱い、フュージョン画像を作成する業務が多くなった現在の核医学検査において、とても役に立つ内容であったと感じました。もちろん、従来から実施している心筋負荷シンチグラフィ検査で実施している心電図検査の見方も負荷や容態を把握するために有益な内容であったと思います。さらに、同職種間においても、このようにモダリティ同士のチームワークが必要になってきていると実感いたしました。後者のJFAとの合同企画は正に、このチームワークをいかにして良くするかといった内容であり、W杯の開催年としてもふさわしいテーマであったと思います。

JSRT学術大会では、専門分野の核医学を中心に参加しました。業務の都合により金曜日から

ら3日間の参加でしたが、ポスター及び口述発表会場ともに人で溢れていたことがとても印象的です。口述発表では特に英語の発表や質疑応答が以前よりも多くなった印象でした。特に口述発表会場では、座れずに立って聞いている人が多く、質疑応答の活発さにこれまで以上の熱気を感じました。JSRT 秋季大会での学術発表の経験はありましたが、今大会で初めて春季大会で発表することになりました。このような活気溢れる会場で緊張しながらも口述発表をしたことは、忘れることのできない貴重な体験となりました。また、核医学検査においては新たに承認を得た放射性医薬品が出たことで、より活発に研究が行われ、核医学検査従事者の意識も向いていたと考えられます。

今大会では、核医学分科会の情報交換会にも参加しました。ここでは、核医学分科会が企画した教育講演「An RF-transparent PET ring for acquiring simultaneous PET/MRI data」の講師を務めてくださった Craig S. Levin 氏に会うことができました。多くの方々と面識を広め情報交換ができたことは何ものにも変え難い貴重で有意義な時間となりました。これまでの核医学関連の集まりには、女性の参加者が少ないことが多かったのですが、今回は女性や若い参加者もあり、良い意味で驚き、嬉しく感じました。このような参加者を目の当たりにし、前述の学術大会の印象や新薬の登場も含め、今後更に核医学が発展していく予感と期待を抱きました。

以上のような魅力ある学術発表やシンポジウムなどに多く参加しつつも、ITEMで最新機器や設備を見たいと思っていました。そのような希望を叶えてくれたのが、スマートフォンのアプリケーションソフトでした。以前から活用して来ましたが、今大会で初めて“ITEM案内”の項目を活用したことで、あらかじめ各企業の出展品と場所を確認することができたので、空いている僅かな時間でもターゲットを絞り見ることができました(写真)。また、海外からの招聘講師や英語での発表を聞く機会が多かったため、このアプリで抄録などを同時に確認する



写真 JRC2014 アプリケーションソフトウェアの ITEM 案内項目

ことで、聞き取りにくい情報を捕捉でき、以前よりも理解が深まった実感がありました。それと同時に語学力を養う必要性を感じたので、可能な限り英語表記で使用しておりました。

最後に

今大会で特に感じたことは核医学の専門性だけでなく、CTやMRI検査といったほかのモダリティとの画像情報の融合や連携が重要となってきているということです。そして、多方向からの考え方や情報を得るためには多くの方との繋がりが重要であることを実感いたしました。正に、メインテーマである「向き合う、つながる、そして広がる」を知見及び人脈ともに経験できた大会となりました。

前述のアプリにおいて英語表記の場合のみ Information に件名が“Thank you!!”の電子メールを見ることができます。この電子メールの最後には“We look forward to seeing you again April 16-19, 2015, in Yokohama!”とありました。これを見たときに、また来年もつながりや広がりを持てるように、今大会で得た課題に真摯に向き合い、研究や業務に励んでいこうと強く思いました。

(国際医療福祉大学 保健医療学部 放射線・情報科学科)